様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：６４４０１
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３０００４０

研究課題名（和文）台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study of Change in the Classification of Taiwan's Indigenous Peoples

研究代表者
野林　厚志（Nobayashi, Atsushi）

国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・教授

研究者番号：１０２９０９２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,100,000円

研究成果の概要（和文）：台湾原住民族のエスニシティ（「民族らしさ」）を個人ならびに集団のレベルで観察、分析するとともに、エスニシティが生成した歴史的な背景に関わる資料の渉猟、検証を進めた。
研究から得られた知見は、台湾における民族集団の再編は、研究者や施政者側が行ってきた集団の規定とは異なる、文化要素の探究やエスノヒストリーの掘り起こしが当事者側に強く意識されて進められており、既存の民族分類を更新していくような換骨奪胎の特徴を有した自己説明がエスニシティ構築の重要な過程ということである。
これらの成果は研究参加者の各業績で発信するとともに、国際ワークショップの開催とその成果論集の刊行、国際連携展示会の開催で発信を行った。

研究成果の概要（英文）：We studied the ethnicity of Taiwan's indigenous peoples in individuals and ethnic groups. We also reviewed documentary records which showed the process of classification of Taiwan indigenous groups by ethnicity. The findings obtained from the research suggest that Taiwan indigenous peoples intentionally examine cultural elements or ethno-history to reorganize of ethnic groups, which was ignored or unknown by researchers or rulers when the previous classification was established. The current process would be a kind of the self-explanation to modify and update an existing ethnic classification idea without new invention. The members published articles and book chapters on the results of the study, as well as holding an international workshop and the international collaborated exhibition in the National Museum of Ethnology, Osaka.

研究分野：人類学

キーワード：台湾原住民族　エスニシティ　民族分類　民族認定　文化資源　平埔族　植民地統治

１．研究開始当初の背景

台湾には人口の大多数を占める漢族系住民のほかに、全体の約 2%弱をオーストロネシア系諸民族が占めている。彼らは現在、「原住民族」という公的な総称で呼ばれ、社会的には台湾の先住民族として認知されている。民族の構成は日本統治期になされた分類にもとづく時期が、1945 年以降の中華民国施政下でも続いたが、台湾の民主化が進む中で、原住民族自身がその民族アイデンティティにもとづき、自律的な民族集団の再編を進めてきた。具体的には 1990 年代半ばまで、9 族に分類されてきた民族集団が本研究の申請段階(2013 年 10 月)で 14 族に増えていた。

こうした状況のなかで、研究代表者や研究分担者は、原住民族の個人やコミュニティレベルでの民族アイデンティティと分類集団との間で矛盾が生じていたこと、都市化や民族間交渉が強まることによって、個人の民族アイデンティティが重層化していることに着目していた。

２．研究の目的

台湾原住民族の現在のエスニシティの動態を、個人ならびに集団のレベルで観察、分析し、個人の民族への帰属意識と民族集団のエスニシティとの関係に関する人類学的モデルを引き出すことである。個人の意識と帰属集団のエスニシティとの間に存在する共通性とずれを現地調査ならびに歴史資料の渉猟を通して明らかにし、そのうえで、公的、制度的な民族分類が、個人やコミュニティをこえた規模でエスニシティを規定する作用と、個人やコミュニティが主体となりエスニシティを公的に実体化させていく反作用のなかで、民族集団が社会の中で位置づけられていく過程を明示することを目指す。

３．研究の方法

本研究では、（１）原住民族コミュニティの成員を対象に、1)社会関係、2)言語、3)物質文化、 4)文化実践、5)生業等が、個人の民族アイデンティティと、集団のエスニシティとどのような関係にあるのかについて参与観察、聞き取りを主とする現地調査を行う。（２）民族認定に関わる認定規準についての調査、（３）エスニシティが生成する歴史的な背景に関わる資料の渉猟を行い、 分析に必要な基礎データを収集する。データの情報と個々の成果は、各年度の研究会合、海外の研究協力者と合同の研究集会を通して参加者全員で共有し、研究の段階的な発展を促す。研究期間中に民族への帰属意識と集団のエスニシティとの関係を主題とする国際ワークショップを開催し、研究成果の公開と自己評価を行う。

４．研究成果

研究代表者の野林は、物質文化のなかでも特にエスニシティが可視化されやすい衣服や装身具に焦点をあてた調査、研究を進め、可視化される物質文化には、当事者のアイデンティティだけでなく、接触する他集団への反応が組み込まれていくことを具体的に例証した。

研究分担者の宮岡は、ツォウ族から分離・独立したサアロア族、カナカナブ族について、現地調査と文献調査により民族分類とエスニシティの動態の歴史的過程を明らかにした。また、ツォウ側のエスニシティの再構成と変動についても、今日における文化資源や文化実践、固有名の回復等の諸観点から調査研究を進めた。これにより、原住民族のアイデンティティが民族分類に大きく規定されつつ、歴史経験、文化資源、記憶の共有により変動する様相を明らかとした。

研究分担者の松岡は、パイワン族・ルカイ族を対象に、文化実践からみたエスニシティの動態について調査を進めた。パイワン族は比較的大きな民族であり、文化実践の典型でもある祭典や儀礼における民族のアイデンティティはゆるがないものである一方でパイワン族のブツル系とラヴァル系双方の住民、およびルカイ族が混住する状況下においては、集落ごとの文化の示差的差異が顕著であることを知見として得ることになった。

研究分担者の森口は、過去 30 年間の現地調査による言語資料の中でブヌン語（テキスト、辞書、文法）とヤミ語の資料の精査を行い、ブヌン語のテキストの編集とコンコーダンスの作成を完了した。ヤミ語については、テキスト、歌謡の解釈とその裏にある世界観を言語の面から考察した。台湾における民族認定には言語の系統や使用状況が重視される一方で、言語表現で示される世界観までふみこんだエスニシティは必ずしも考慮されておらず、今後、言語表現にあらわれる世界観の相違や方言差が、民族としての自律性を示す指標として有効かどうかを検証する重要かつ基盤をなすデータの構築を行った。

研究分担者の笠原は、今日の台湾原住民族に見られるアイデンティティの可変性、民族枠組の刷新を求める当事者たちの動きが、日本統治時代の民族分類と深く結びついていることを文献資料にもとづいて検証した。現在における一連の民族認定問題は、当時の分類において見落とされたか、あるいは置き去りにされた部分に集中して現れる傾向にあり、それらの問題を歴史的文脈に即して解明する点において本研究の中心的課題であるエスニシティの動態の研究に大きく寄与する。

以上の点を総括すれば、現在の台湾における民族集団の再編は、研究者や施政者側が行ってきた集団の規定とは異なる部分における相違や共通点が、当事者側に強く意識されることによって進められていると考えられる。これらは外部者が理解しうる事実から規定するもしくは見出したエスニシティは、当

事者にとっては不完全なものであるということを意味する。一方で、それは当事者である原住民族にしか理解できない、もしくは引き出せないようなエスニシティに関わる要素が存在するといったことを必ずしも結論として導くようなことではない。むしろ、エスニシティを再構築するために必要な文化要素の探究やエスノヒストリーの掘り起こしが当事者によって進められている部分が少なくない。その意味において、現在の原住民族集団の再編は、もともとの民族分類を更新していくような換骨奪胎の特徴を有する自己の存在説明となっている。

研究代表者、分担者はこれらの研究成果の公開とその内容の外部研究者による検証と議論を目的とし、国際ワークショップ「台湾原住民の姓名と身分登録–過去と現在をつなぐ文化・社会・制度–」を 2015 年 12 月に開催した。これには、台湾において原住民族の認定の中心となっている台湾の国立政治大学の研究者を招聘し、集団のエスニシティと個人のアイデンティティの接合点となる、個人の民族名の動態についての研究発表とそれに関わる議論を進めた。この成果は現在編集を進めており、2018 年度中には刊行されることが確定している（図書①）。

また、代表者、分担者は国立台湾大学で、本研究期間中に毎年開催されていた国際研究集会「台日原住民研究論壇」に参加し、ほぼ全員が全回出席し、台湾ならびに米国、カナダからの参加者とともに、最新の研究成果の共有をはかるとともに、研究動向の把握に努め、海外学術研究の意義を活かした研究活動を進めた。こうした研究成果の現地社会における発信は、現地の学術媒体や一般メディアの関心も惹きつけることになり、当該研究課題の内容や成果が、現地において相応のインパクトをもって発信された。

研究代表者は研究成果の国内における発信を強化し、特に非原住民族もしくは若い世代の原住民族エスニシティ認識のありかたを紹介するために、国立民族学博物館において、国際連携展示「企画展「順益台湾原住民博物館所蔵・学生創作ポスター展　台湾原住民族をめぐるイメージ」」を企画、開催した（会期：2016 年 8 月 4 日（木）～10 月 4 日（火））。国際学術協定を研究代表者の所属機関と締結している台湾の順益台湾原住民博物館との共催で開催された展示会は、視覚化されるエスニシティと認識されるエスニシティとの関係性が浮き彫りになり、研究成果の一般発信と並行し、本研究課題に後半における問題設定に大きな役割を果たすことになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 17 件）

① 野林厚志「エスニシティを可視化する手段としての衣服」『国立民族学博物館研究報告』42(4): 379-410,2018.査読有
② 笠原政治「伊能嘉矩と平埔族の分類」『台湾原住民研究』21: 3-37,2017.査読有
③ 宮岡真央子「重層化する記憶の場–〈牡丹社〉コメモレイションの通時的考察」『文化人類学』81(2):266-283,2016.査読有
④ 笠原政治「伊能嘉矩の原住民族分類における諸種の資料源 」『台湾原住民研究』20: 5-27,2016.査読有
⑤ 笠原政治「名著『台湾高砂族系統所属の研究』をどう読むか(後篇)」 『台湾原住民研究』19: 136-163,2014.査読有
⑥ 松岡格「可視化のためのツール・ユニット・エージェント―戦前の原住民社会に対する統治とその影響について」『民族学界』33:81-106,2014.査読有
⑦ 笠原政治「名著『台湾高砂族系統所属の研究』をどう読むか(前篇)」 『台湾原住民研究』18: 75-96,2014.査読有

〔学会発表〕（計 13 件）

① 宮岡真央子「戦後台湾の〈生活改進運動〉：先住民の経験をめぐる初歩的検討」日本民俗学会第 69 回年会 2017.10.15,仏教大学（京都）
② 野林厚志「原住民をめぐるイメージ：順益台湾原住民博物館学生ポスター作品を事例として」第九屆台日原住民研究論壇 2016.08.22 国立政治大学（台北・台湾）
③ 野林厚志「台湾ヤミ族の名制と社会関係」『台湾原住民の姓名と身分登録：過去と現在をつなぐ文化・社会・制度』2015.12.12,早稲田大学（東京）
④ 宮岡真央子「ツォウの姓名の過去と現在」『台湾原住民の姓名と身分登録：過去と現在をつなぐ文化・社会・制度』2015.12.12,早稲田大学（東京）
⑤ 森口恒一「言語の発生から見た台湾原住民の『なまえ』」『台湾原住民の姓名と身分登録：過去と現在をつなぐ文化・社会・制度』2015.12.12,早稲田大学（東京）
⑥ Nobayashi,A. Thinking Ethnicity through the Collections. International Committee for Museums and Collections of Ethnography Annual Conference, 2015.10.25. Vietnam Museum of Ethnology(Hanoi,Vietnam)
⑦ Nobayashi,A. Ethnicity of Indigenous Peoples Visualized in Material Culture. The 12th. Annual Conference of the European Association of Taiwan Studies, 2015.04.09. Jagiellon University (Krakow, Poland).

〔図書〕（計 16 件）

① 野林厚志・松岡格編『台湾原住民の姓名と身分登録』国立民族学博物館 114p,2018 (印刷中)
② Nobayashi,A. The Significance of Museum Materials in the Name Correction Movement of the Pingpu

Peoples of Taiwan, in *Social Movements and the Production of Knowledge* National Museum of Ethnology, Osaka pp.101-119,2015

③ 野林厚志編『台湾原住民研究の射程−接合される過去と現在』順益台湾原住民博物館 400p,2014

④ 野林厚志『タイワンイノシシを追う−民族学と考古学の出会い』臨川書店 217p,2014

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
国際ワークショップの開催
「台湾原住民の姓名と身分登録−過去と現在をつなぐ文化・社会・制度−」2015 年 12 月 12 日,早稲田大学（東京）

招待講演（海外）
①笠原政治「伊能嘉矩と台湾原住民族研究(伊能嘉矩與台湾原住民族研究)」『重返田野−伊能嘉矩與台湾文化再発現』国立台湾大学 2018.03.08.
② Nobayashi, A. *An Ethnoarchaeological approach to hunting: a comparative study of hunting techniques among Taiwanese Indigenous groups*, School of sociological and anthropological studies and the chair in Taiwan studies. University of Ottawa 2015.02.26.

中間報告書
Moriguchi, T., Tiyo G. and Jaygon G.2016 *Vihay d' Ichbayat*, 126p

インターネット、メディアを通じた成果の一般発信
野林厚志 2016「作られたエスニシティから築きあげるエスニシティへ」『科研費 NEWS』Vol.3:4,日本学術振興会

原住民電視台ニュース
https://www.youtube.com/watch?v=v_qWbqa7Gyg (2017.09.05)

https://www.youtube.com/watch?v=PXRimEI5Bgg (2016.08.23)

https://www.youtube.com/watch?v=QEBP101nMEQ (2014.10.12)

展示会
国立民族学博物館企画展示・国際連携展示「企画展「順益台湾原住民博物館所蔵・学生創作ポスター展　台湾原住民族をめぐるイメージ」」会期：2016 年 8 月 4 日（木）～10 月 4 日（火）場所：国立民族学博物館

６．研究組織
(1)研究代表者
野林　厚志（NOBAYASHI, Atsushi）
国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・教授
研究者番号：１０２９０９２５

(2)研究分担者
宮岡　真央子（MIYAOAK, Maoko）
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号：７０４３５１１３

松岡　格（MATSUOKA, Tadasu）
獨協大学・国際教養学部・准教授
研究者番号：４０５９８４１３

笠原　政治（KASAHARA, Masaharu）
横浜国立大学・教育学部・名誉教授
研究者番号：７０１３０７４７

森口　恒一
静岡大学・人文社会科学部・名誉教授
研究者番号：１０１４５２７９

(3)連携研究者
（　　）

(4)研究協力者
（　　）